

「青木滋先生の告別式に参列して」



平成18年12月2日、土曜日、朝一番の上越新幹線で涙雨降る新潟駅を出発し東京へ向かいました。車中、大学3年の時に初めて先生と出会ってからのことが、映画の場面のように頭の中を巡りました。

…青木先生は、昭和45年5月に東京都より新潟大学理学部付属地盤災害研究施設に助教授として採用され、その後 積雪地域災害研究センターとして組織替えされてからは2度センター長を務められ、平成8年3月で退官されるまでの約26年間に亘り数多くの学生を指導されてきました。赴任された当時は大学紛争のピークを越えた頃で、先生は「応用地質学」の啓蒙・普及に尽力され、

「これからの地質学は人の為の人に役立つ地質学にしていかなければだめだ」と熱く語っていました。それまでの大学はどちらかというと研究のための学問という印象が強かったため、先生の話非常に新鮮に感じたことを覚えています。また、積雪地域災害研究センターの使命でもあったと思いますが、地すべり等の土砂災害・水害・地震・雪崩などの対応や調査研究では、地元の人達や業界および行政関係者に亘る幅広い層の方々と精力的にお付き合いされており、先生はいつも多忙～超多忙であったように記憶しています。平成3年4月には科学技術会議専門委員にも任命（内閣総理大臣）されていますが、地元の各種委員会や多くの学会にも精力的に関わっておられ、先生の影響力は新潟県で止まることはありませんでした。

…先生は私が大学3年の時に赴任され「応用地質学」の講義をうけましたが、本格的にお付き合いが始まったのは大学4年になって卒論の指導教官をお願いしてからになります（昭和45年度の上條先輩に次いで2番目の教え子となりました）。卒論を進めるに際し、まず自分がやろうとするテーマに関係する過去の論文や調査報告等を全て読むこと、という指導がありました。私は新潟平野東縁部の第四系について、矢代田層と魚沼層の関係をテーマにしましたので、それまでに公表されていた矢代田層と魚沼層に関連する論文等を収集整理しましたが、資料は優に100編を超え、読破する作業は7月までかかり、現地調査を開始したのは夏休みになってからでした。この長すぎるように思えた準備期間は、問題

*サンコーコンサルタント(株)北陸支店

点を明確にしてくれ、調査目的がはっきりしたこともあって、その後の現地踏査や論文作成は比較的スムーズに進みました。この時の資料収集方法や手順、準備の大切さは私が社会に出てからの大きな財産となっています。

…大学4年の途中、先生から卒業したらどうするというお話があり、私は民間企業を希望しました。先生の筑波大学時代の後輩が勤務していたことや、新大地鉱の2年先輩が勤めていたこともあったのでしょうか、創立10年位の若い会社で地質も活かせるということで現在の会社を紹介して戴きました。当時は団塊世代の就職時期で受験者も多かったようですが、無事採用され現在に至っています。また、大学を卒業する時に先生から「どんな仕事でも10年間は我慢してやってみろ。10年経てば自分の云いたい事ややりたい事が自ずと見えてくるものだ。」との言葉を戴きました。この言葉は“何事も10年間は実力を蓄える時期”と解釈し、「石の上にも3年」の青木先生バージョン」として私の社会人としての礎になっています。

…昭和47年4月から現在の会社の東京本社に勤務しましたが、昭和48年秋に新潟営業所が開設され、翌年の6月に新潟転勤となり、青木先生との交遊が復活しました。転勤祝いということで、地鉱では伝説のバーともいえる古町の「千」に連れて行って戴きました。その後、バー千では幾度となくグラスを傾けることになりました。

…私は独身時代が長かったことありますが、仕事上 報告書を書くようになると、夜11時頃まで残業すると頭が冴えて眠れないという言い訳のもと、それからタクシーで古町に出かけました(当時の西地区には遅くまで開いている飲み屋は殆どなし)。飲み屋のドアを開けると先生が一人カウンターでグラスを傾けている所に時々遭遇しました。大抵は出張の帰りや市内での会議の後で一人くつろいでおられるようでした。待ち合わせをした訳ではなく、携帯電話も無い時代、私もどこの飲み屋のドアを開けるか決まっている訳ではありませんので、こういう偶然が重なった時は何故か嬉しくて、1～2時過ぎまで情報交換をしたり仕事上の悩みを聞いて戴きながらグラスを傾けたことを思い出します。

…古町もバー全盛時代からスナックの時代へと移り、どこの店にもカラオケが設置されるようになりました。いつの頃からか先生は谷村新司の「昴」や「群青」を好んで歌われるようになりました。ちょっと低音の効いた味のある歌声でした。また、その後何年かしてから、中村雅俊の歌を好んで歌われるようになりました。先生に「若い人の歌も歌うんですね」とお聞きしたら、「娘がカセットテープに録音してくれるんだ」と嬉しそうに話していたことを思い出します。今でも目を閉じると耳に心地良いあの先生の歌声が蘇ります。

…私は59豪雪の3月に青木先生御夫妻の仲人で結婚式を挙げました。当時としては晩婚のこともあって先生にはいろいろとご心配をおかけしましたが、先生の娘さんと妻が同じ名前だったこともあり、大変喜んで戴いたことを思い出します。その後、子供が二人生まれ、長男は歩き始めのころ西大畑の官舎に連れて遊びに行きましたが、下の娘を連れて遊びに行く機会がなかったことが今でも心残りに思います。

…先生と新潟応用地質研究会との関わりは、いわゆる第二期(昭和48～53年)からで昭和

50年度より幹事長に就任され、また、昭和61年の再々発足に際しては当会の復活にも尽力され、副会長に就任されています。

青木先生は退官後、東京に戻られましたが、平成11年9月に事故に遭われて入院生活を余儀なくされました。ご家族をはじめ多くの皆様の回復への願いもむなしく、平成18年11月29日、午前4時43分に永眠されました。享年75年。

告別式当日、この日の東京は雲一つない青空が広がっていました。新潟からも小林会長、佐藤副会長をはじめたくさんの方々が参列されていました。ご家族、ご親族そしてたくさんのお教え子達に見送られ、先生の大好きだった谷村新司の歌声が流れる中での旅立ちでした。最後に奥様が「お世話になった新潟に対して中越地震の時は何もお手伝いできなくて…」と話されましたが、私は心の中でこう呟いていました「先生、大丈夫です。先生が目指した“応用地質”は新潟の地に深い根を張っています。先生の歩いた道はもう細い道ではありません。官民学を問わず、皆で汗を流して対応していますので安心して下さい。」。

青木先生、長い間 本当に有難うございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

【幹事会より】

総会から秋季例会までの間に、当研究会の発展にご功績のありました新潟大学名誉教授の茅原一也先生（名誉会員）と青木滋先生（元副会長、名誉会員）が相次いでご逝去されました。

急逝されたこともあり、ご承知されていない会員もおられると思います。両先生の想い出や追悼文を事務局にお寄せ下さい。次号の会誌に掲載させて頂きたいと思っております。